

平成30年度篠山市立西紀中学校学校評価

次年度改善の柱

- 1 社会や将来の糸口をつかむための自治的能力や社会参画する力を育成するため、生徒会・教科係など学校生活の様々な場面で話し合い、合意形成し、協力・実践する活動や小中連携したキャリア教育を充実する。部活ガイドラインに基づき効果的・効率的な活動を進める。(学校・学級集団 キャリア教育)
- 2 予習、書くことによる個人思考、対話による集団思考、振り返り等の授業スタンダードが円滑に循環し、知識・技能が他の学習や生活で活用できるように、振り返りと評価の工夫改善を一層図る。(学習指導)
- 3 いじめ、不登校等に対して、即時即日で関係機関とも連携した組織的な教育相談を引き続き進めるとともに、他者や自己との対話による道徳の時間を要として学校の教育活動全体で、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う。(生徒指導、特に道徳教育)
- 4 生徒・保護者・地域・教職員による四つの力委員会により、社会に開かれた教育課程を一層進めるとともに、生徒に向き合う時間の確保のため、業務のやり方の工夫、効率化を進める。(コミュニティ・スクール)

※★自己評価：成果、●自己評価：課題及び改善策 □学校関係者評価（11月及び2月の意見）

重点Ⅰ 危機管理意識を高め、自らの命を守り抜く安全・防災教育

- ★西紀中学生3つの宝（挨拶・傾聴・全力）が生徒に定着し、予告なし避難訓練で判断する力がついてきている。毎月の安全点検、緊急連絡体制の確認に加え、地域と連携した危険箇所点検、エビメン研修など昨年度の課題改善にも取り組めた。
- 自転車保険の加入や安全な登下校について小中連携して取り組み、さらに安全意識を高める。
- 学校が意欲的に取り組んでいる。保護者と連携を取りながら、歩道のない通学路の安全意識の向上を図る。

重点Ⅱ 誇りを感じる学校・学級集団

- ★学校生活の様々な場面で話し合い活動を取り入れ、意見を出し合い、深く考えることができています。教科係は連絡だけではなく、予習・復習テストなど自主的に活動できており、行事では、クラス一丸となって取り組むことができた。部活動では、各顧問が限られた練習時間の中で効果を上げるために工夫をしている。
- スポーツ庁、県教育委員会の部活動ガイドラインに基づき、休養日や活動時間など学校内外で統一する。行事は、クラス削減の中で、縦割りなどの形態を考える必要がある。また、行事で時間が取られるため学活の効果的な使い方を考える。
- 行事や授業などで見る生徒の姿から、よき伝統が守られて生徒たちが学級・学校生活に主体的に取り組んでいる。

重点Ⅲ 未来を見据えて個性・能力の伸長を図るキャリア教育

- ★キャリアノートの特長を参考に学期の振り返りや行事の振り返り等をキャリアファイルにまとめることができた。ねらいを明確にしてトライやる・ウィークやオープンハイスクールの事前事後指導を行い、将来や社会とのつながりを考えさせることができた。ボランティア活動に参加する生徒の増加や生徒会の啓発など愛郷心が育っている。
- 1年次からのキャリア教育の指導計画のさらなる改善を図る。また、地域人材を活用することが少なかった。ボランティア活動に参加した生徒の体験を学校全体で共有する機会を工夫する。
- 進路指導に偏ったキャリア教育の意識が生徒、保護者、教職員にあるのかもしれないが、トライやる・ウィークなどの事前事後指導やキャリアノートの活用などで自分の移り変わりが記録されている。年齢的なこともあるが生き方指導を信念を持って続けてほしい。

重点Ⅳ 基礎力・思考力・実践力を育む学習指導・授業改善

- ★少人数授業や放課後補充学習等、個に合わせた指導に取り組むとともに、予習、目標の提示、書くことによる個人思考、対話による集団思考、振り返り等の授業スタンダードが定着しつつある。また、タブレットを活用し思考を深める授業が増加した。
- 振り返りと評価については、取り組みが進められているところであり、引き続き取り組んでいく。問題解決能力をさらに高めるよう、既習事項を活用する工夫を進める。
- 学力調査でも成果が現れており、「主体的対話的で深い学び」の実現に向けた方向性が適切である。生徒の気持ちをしっかりと取り取り組んでいる。学校の荒れは一瞬でやってくるので、不断の授業改善を続けていく。

重点Ⅴ 存在感や達成感を大切にしたい生徒指導

- ★不登校生徒のペースにあわせて別室指導、スクールカウンセラーによるカウンセリング、スクールソーシャルワーカーによるケース会議によって、生徒の課題に応じて多様な支援を行い、不登校生徒の登校や問題行動に対する不安の軽減につなげることができた。生徒会が集会で「いじめゼロ宣言」を暗唱し、情報機器のルールとあわせてテストを行い、全体に浸透してきた。教師間の「いじめの定義」の共通理解が進んだ。
- 定期的に警察とは情報交換ができていて他の機関とも連携していく必要がある。引き続き、「いじめゼロ宣言」「情報ルール」の啓発を行うとともに、保護者、地域に対し「いじめの定義」とそれに対して学校がどのように対応するかさらに周知し、理解を求めていく。
- 生徒の様子を一生懸命見ていただき、不登校支援の成果が上がっている。不登校をはじめ問題行動に対する未然防止を充実させる。また、人的支援も継続して必要である。

重点Ⅵ 豊かな人間性・社会性を育む特別支援教育、道徳教育、人権教育

- ★各学期毎に支援を要する生徒を確認し、全職員での共通理解がはかられている。教職員間で道徳授業の参観を積極的に行い、授業後に授業内容や生徒の反応などについて検討できている。「人権朝会（生徒集会）」について、生徒だけでなく教師にとってもよい勉強（ミニ研修）になっている。
- 来年度から始まる道徳の教科書とあわせて兵庫版副読本や人権教材の取り扱いも検討し、指導の充実を図る。
- イベントをすることが大事だと捉えられがちであるが、特別支援教育は全ての子どもに関わる教育なので、日頃からかわっていることが不登校生徒の減少やいじめの解消にもつながっている。

重点Ⅶ 美しく活気に満ちたコミュニティ・スクール

- ★ホームページに授業の様子などがアップされるため保護者、地域が関心を持ち、学校理解につながっている。オープンスクールなどへの保護者の参加率も高い。四つの力委員会で生徒会が意見を積極的に言えるようになり、地域での対応や学校での改善につながっている。また、ボランティアなどへの地域の支援により学校の負担が軽減されている。ボランティアに参加する生徒が増え、黒豆栽培講師のように人的支援が授業に役に立った。特別支援教育において小中連携が深まった。
- 小中連携と比べて中高連携は頻度が少ないが、研究授業に参加するなど連携を深めていく。
- 生徒の地域に対する意識が高まるとともに、生徒のニーズにマッチした教育活動が展開されるなど「四つの力委員会」がよく機能している。大学生サークル等地域団体もスクールアシスタントとしていっそう学校との結びつきを強める。

重点Ⅷ 笑顔と元気に満ちた教職員組織

- ★この数年で取り組んできた、「書く力・発信する力」「主体的・対話的で深い学び」「ICT」等の研究が、少しずつ形になり教師一人一人の自信にもつながってきている。
- 授業の準備（授業研究）やノート点検、分掌の仕事等でさらに効率化を進める。職員集団が変わっていく中で取り組みの継承を進めていく。
- 教職員が生徒のために取り組んでいることが自信・元気につながるのは嬉しいことであるが、仕事と家庭のバランスも大切である。コミュニティ・スクールが上手く活用され、学校の応援団になればよい。